

長野県立歴史館たより

2020年 夏号 vol.103

特集

地酒王国 信州



常設展示室

原始 華やかな土器文化と生業

今回は土器が最も華やかになる縄文時代中期のうち、後葉（約4,800年前頃）に営まれた3つの縄文集落（塩尻市上木戸遺跡・小諸市郷土遺跡・千曲市屋代遺跡群）を取り上げ、特徴的な土器を中心に石器やアクセサリなどから当時の文化や生業について展示しました。

写真手前左側の土器は「柵倉式」と呼ばれ、上下に渦巻きが付いた棒状の貼付文と上向きに伸びる棘が特徴です。このような文様の土器は中越地域から奥信濃に分布します。屋代遺跡群には集落を開くにあたって埋甕としてもたらされ、その後地元の粘土を用いて作られるようになったと推測しています。同遺跡から大量に発見されたサケ・マス類の骨・歯等から、当時の人びとが千曲川・

信濃川を生業の場として行き来し、生活や文化を共有していたことを想像させます。柵倉式の手法はさらに犀川をさかのぼって中信地域へ伝わっていきます。その後写真右上の華やかな取っ手の土器（大木式系）が川沿いのルートを伝って北方からもたらされたと考えられます。



常設展・原始コーナー（屋代遺跡群出土土器 当館蔵）



伝雪舟《湖亭春望図》
（吉川史料館蔵複製、当館蔵）

古代 天与清啓と雪舟の描いた「湖亭春望図」

天与清啓は室町時代中期の僧侶です。下伊那の竜東地区を治めた知久氏の出身で、建仁寺禅居庵の塔主となり、さらに1451（宝徳3）年には遣明使の副使として一行に加えられ、明に渡りました。明での外交功績が認められ、帰国後は信濃国伊那郡開善寺（飯田市川路）の住持等を務めました。

天与の外交手腕を高く評価した室町幕府は、1460（寛正元）年に天与を遣明正使に任命しました。つまり、天与を「日本の顔」として明に向かわせることとしたのです。この二度目の遣明使には、画僧である雪舟も同行していました。雪舟の描いた水墨画「湖亭春望図」には天与が賛を記しています。

外交上の功績のみならず、当時の禅僧として、また学僧や詩僧としても足跡を残した天与清啓。信濃国の名僧の一人です。

近世

佐久間象山が製造したとされる短銃

写真の短銃は、全長23.5cm、重さ520g、口径1.4cm。持ち上げると見た目以上にずっしりと重さを感じます。松代藩士の佐久間象山が製造したと伝承されてきました。これは象山とつながりのあった千曲市の旧家に伝わった短銃で、象山の妻が当家に売った領収書とともに「安政度製造 大星發明之短銃」と記された紙片が遺されていました。大星は象山の実名です。松代（現在の長野市）に生まれ、洋学を学び、兵器等の製造もおこなった幕末日本を代表する洋学における先駆者の一人です。

短銃を見てみると、17世紀にヨーロッパで発明された燧石式（フリント・ロック式）という点火法が採用されています。短銃上部の鶏頭（コック）にはめこんだ燧石（火打石）を当金に打ち付

け火花を発生させ、点火、発射するというものです。しかし、ヨーロッパで広く採用されたこの点火法は、戦いから離れ平和な時代となった日本の銃工たちには注目されませんでした。日本で燧石式が注目されるのは、幕末に外国船の来航が相次ぐころになります。戦うために燧石銃が各地でつくられましたが、その後もなく風雨に強い点火法の雷汞（らいこう）を用いた雷管式点火法が紹介されると、燧石銃は雷管銃に取って代わられることになります。



燧石銃（当館蔵）

近現代

木製冷蔵庫から電気冷蔵庫へ

戦後の高度経済成長を象徴する電化製品といえば、「白黒テレビ」「洗濯機」「冷蔵庫」で、「三種の神器」と言われました。さて、その「冷蔵庫」ですが、「電気冷蔵庫」が普及する以前は、写真①のような「木製冷蔵庫」が使われました。「木製冷蔵庫」は「氷式冷蔵庫」「冷蔵箱」とも呼ばれ、二段構造の上段に氷を入れ、その冷気によって下段に入れた食品を冷やしました。中に入れる氷は氷屋から購入しました。

写真②は1958（昭和33）年製造の日立製作所製の電気冷蔵庫です。氷を使わなくても食品を冷やすことのできる冷蔵庫として、一般家庭へ普及していきました。庫内上部には、製氷機も備えられ、氷は買わなくても家庭で作ることができるようになりました。このような冷蔵庫の機能の発達には、より長期的な食品保存を可能とし、庶民の食生活に大きな影響を与えました。



写真①「木製冷蔵庫」



写真②「電気冷蔵庫」



リニューアルをした昭和戦後の展示コーナー

地酒王国 信州

米作りをしてきた日本人にとって、米を原料とする酒（日本酒）は、現代でも冠婚葬祭や日常生活に欠かせないものです。地元の米や水を使って醸造する酒造りは、各地の蔵元（酒蔵）で行われてきました。

現在、長野県には80の酒蔵があり、新潟県の89に次いで国内第2位です。酒蔵は県内各地にあり、豊かな自然を活かした個性あふれる地酒が造られています。こうしたことから30年ほど前、県酒造組合では長野県を「地酒王国」と名付けました。この地酒王国信州はどのように誕生したのでしょうか。

1 信州に酒蔵誕生

現在ある酒蔵の創業は半数が江戸時代です。江戸時代は米を基本とした社会で、村で生産された米は税として納められました。米作りや収納、納税、換金に携わる村役人は地域の有力者で、多くの米が集まりました。宿場や地域で酒の需要もあったことから、集積された米を用いて酒を造る酒蔵が信州各地に200以上誕生しています。



『諸国道中商人鑑』(当館蔵)に載る江戸時代の酒看板

絵画、書、生花、囲碁などの文化が広まった江戸時代以降、資産家でもある酒蔵には、文化人や政治家、軍人等が訪れ、逗留した記録があります。



佐竹永湖《酒造りの図》(黒澤酒造株式会社蔵)



犬養毅愛用の盃 (株式会社豊島屋蔵)

2 幾多の試練

明治時代に入ると、酒株が解放され、免許料と税金を納めれば誰もが酒造りをすることができる制度になりました。これによって長野県の酒蔵数は1,000を超えました。しかし、経営は厳しく、酒蔵は様ざまな試練を迎えていきます。酒税の値上げ、県外酒の大量流入、原料米の不足、恐慌、戦時体制による生産統制、戦後の自由競争などです。酒造は微生物を利用した醸造であるため、雑菌が混入して腐ってしまうこともありました。

3 研修を積んで銘醸地入り

明治後半以降、鉄道が開通するとおいしい県外酒が大量に進出してきました。これに対抗するには、技術を高めて県外酒に負けない酒を造ることが必要でした。酒造りの技術責任者である杜氏^{とうじ}や蔵人は、県の指導や組合での研修会・品評会を通して生産技術を高め、品質向上や増産を図る努力を積み重ねました。その結果、1919（大正



1928(昭和3)年、第五回中部六縣酒類醤油品評会で受賞した名誉賞旗
(長野県酒造組合諏訪支部蔵)

8)年には酒は県外移出超過となり、昭和に入ると全国清酒品評会で最高賞を獲得するなど、長野県は国内屈指の銘醸地に仲間入りしました。

4 名を広め、地酒王国へ

戦時中の困難をきり抜け、戦後も研修を重ねてうまい酒を造り出していった長野県の酒蔵は、販路拡大を目指します。1952(昭和27)年、県卸協同組合と協力して東京に進出を図りました。板橋

駅前に居酒屋「酒蔵信州」を開店したのです。さらに1954年には小売店「信州酒店」を開業し、信州の酒を「金紋信州」という統一銘柄で売り出し、その名を広めました。

しかしその後、ビールや焼酎等の販売拡大や日本酒離れが進みます。公定価格が廃止され、さらに1級・2級・特級の等級制度も廃止され、厳しい自由競争の時代となりました。これに対し各酒蔵は、

酒の個性化や外国への販路拡大など経営の工夫で時代を生きぬいています。純米酒や吟醸酒、雪中貯蔵酒、湖中酒、花酵母の酒、発泡酒、酒米の自社栽培等です。

5 おわりに

長野県には酒造りに欠かせない良質で多様な水があります。県では独自の酒米「美山錦」「金紋錦」「山恵錦」等も開発してきました。

信州の風土と歴史にはぐくまれた酒造りの展示から、信州の酒の歴史、地域性や多様性、菌や自然を巧みに利用し、幾多の困難を乗り越えて王国化させた酒造家のすごさ、日本の食文化の一端をご覧ください。

なお、関連展示として、発酵・長寿県宣言をした長野県の発酵食についてパネルで示し、日本人の食生活や知恵等を紹介しします。また、長野県の酒造と関係の深い東京農業大学の資料（「食と農」の博物館蔵）もパネルで紹介しします。

(畔上不二男)



東京で販売された統一銘柄酒「金紋信州」
(県酒造組合提供)



さん ちゅう

山中の口留番所から 江戸時代を見る

2018・2019年度の当館古文書講座（初級）では上水内郡小川村の鈴木家からお預かりしている史料をテキストに使用しました。

鈴木家は江戸時代を通じて、松代藩が立屋（小川村）に置いた口留番所の管理を代だいおこなってきました。立屋は、小川村から大町方面に抜ける大町道峰通り（大町峰街道）の山中（山間地の意）にありました。松代藩では他領との境に20箇所の口留番所を置いていましたが、松代領から松本領へ抜ける道筋は5つあり、その一つに立屋の口留番所が置かれたのでした。多くの大名領では、



立屋口留番所跡
立屋口留番所がかつて置かれていた場所（小川村立屋）

穀物や特産物が領外へ流出するのを防止し、領内外からの人の出入りを取り締まるために領地の境に口留番所を置いていました。

鈴木家文書には馬に関する史料が複数残されていました。講座に使った1点を紹介します。

指上申一札之事

一、鹿毛馬	三歳	六疋
一、墨毛馬	三歳	七疋
一、栗毛馬	三歳	五疋
一、鹿毛馬	八歳	式疋

馬数 式拾疋

右之馬川中嶋御領分山中より買出申候
無相違御通シ可被下候、以上

宝永三年戌二月

越道村 馬宿 権兵衛（印）

尾州対馬（津島）馬主 作之右衛門（印）

御奉行所

立屋口御番所

史料は1706（宝永3）年2月に越道村（長野

市信州新町）の馬宿（馬を預かる設備のある宿屋）の権兵衛と馬を買った尾州津島（愛知県津島市）の博勞（馬の売買をする人）の作之右衛門が連名で立屋口留番所に対して出したもので、馬の通行を許可してくれるように求めています。馬の毛色、年齢、頭数を列記しています。「尾州津島」は愛知県西部で、津島神社の門前町として発展した都市で、交通・経済の要衝となっていました。

作之右衛門は松代藩（川中島御領分）の山中で買い付けた馬20疋を松本を経て尾州まで運び売り払ったのです。



「尾州津島」の博勞が馬を運んだルート

1702（元禄15）年、1708（宝永5）年、1711～1715（宝永8～正徳5）年にも尾州津島の博勞が2～4月にかけて馬を買い付けに来ていました。当時、信州の山中が尾州に向けての馬の供給地になっていたのです。

立屋を含む山中は、今でこそ過疎と高齢化が進んだ地域となっていますが、かつては麻を作り、馬を飼育・販売し、春先には代掻き馬として沢山の馬を安曇野方面に貸し出しました。水田耕作以外の産業で多くの人びとが生計を立てていたのです。

口留番所という小さな番所に偶然残された史料を追うことで、江戸時代の社会や経済の動きを知ることが出来るのです。（小野和英）

4月1日から歴史館のホームページが新しくなりました!!

長野県立歴史館は、昨年の開館25周年を経て、新たな歴史を歩みはじめました。新しい顔として、県民の皆様により身近に歴史に触れて、楽しんでいただけるように、ホームページを一新いたしました。ぜひ、新ホームページにアクセスしてみてください。

常設展示室の紹介ページ

常設展示のご案内



主な展示物の紹介だけでなく、360°カメラ（展示室の様子が見れる）や音声ガイド（展示物の紹介が聞ける）といった新しい機能が登場し、どこにいても歴史館を楽しめます。



360°カメラ

音声ガイド



こども歴史館のページ

キッズページが“こども歴史館”になりました。新しくキャラクターが登場し、不思議な時間旅行が楽しめます。こども歴史館では、展示物の紹介だけでなく、お家で楽しめるクイズやパズル、工作ページもあります。



クイズ



パズル



工作



デジタル歴史館のページ

長野県立歴史館が所蔵する様々な史料・文書のデジタルデータベースです。「宮坂武男城郭鳥瞰図」など新たに公開された画像もあります。歴史をもっと学びたい、知りたいと思ったときのぞいてみてください。

新ホームページにはまだまだたくさんのおすすめページがあります。ぜひ、長野県立歴史館で検索してみてください。



長野県立歴史館

検索



INFORMATION

インフォメーション

■2020年 6月～9月の行事予定

6月

休館日
1・8
15・22
29

春季展

2020年
「長野県の考古学」
ーいのちをつなぐ技と交流ー
3/14(土)～6/14(日)

講座・イベント

7月

休館日
6・13
20・27

夏季企画展

「地酒王国 信州」
7/11(土)～8/23(日)
■トークセッション
8/8(土) 13:30～15:00
「地酒王国
ー信州酒の地域性、自然、未来ー」

コーディネーター:

笹本 正治 (当館館長)

パネラー:

薄井 智哥子氏 (大雪渓酒造代表取締役)

若林 真実氏 (若林醸造社)

由井 詩織氏 (県酒造組合PR大使)

畔上 不二男 (当館職員)

■講演会

8/22(土) 13:30～15:00
「信州の酒文化と歴史・雑学」

講師: 相沢 節子氏

(県原産地呼称管理委員会日本酒・焼酎委員会相談役)

※イベント等につきましては、今後の状況により、中止または人数制限等を行う場合がございます。詳しくは当館ホームページをご確認いただくか、総合情報課 (026-274-3991) までお問い合わせください。



鬼面の盃 (黒澤酒造株式会社蔵)

歴史館で夏休み

8/2 (日) 10:00～15:00
発酵の学校ほか

信州学出前講座in飯田

飯田市美術博物館
8/29 (土)

9月

休館日
7・14
28・29

秋季企画展

「稲作とフニの誕生」
ー信州と北部九州ー
9/15(火)～11/29(日)
■シンポジウム (予定)
11/22(日) 13:30～15:00



箱清水式土器 (当館蔵)

表紙の写真の解説 ^{かよい どりり} 通徳利

現在の酒の販売容器は茶色・緑色・水色などのガラスビンや紙パックが一般的ですが、戦前までは陶器の酒ビン (徳利) や木製の酒樽でした。しかも貸しビン、貸し樽です。陶器の通徳利は「貧乏徳利」とか「美濃徳利」などとも呼ばれました。容量は5合、1升、2升などです。その名の通り、消費者は酒がなくなると販売店へ空徳利を持って買いに行き、詰めてもらいました。支払いは現金ではなく、ツケによる月払いや半年払い (盆暮れ勘定) でした。まさに地産地消の「地酒」です。

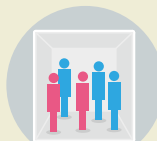
講座・イベント等の対応について

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、予定しておりました講座・イベント等を中止せざるを得ない状況が続いております。

心待ちにされていた皆様には大変申し訳ありませんが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

また、今後予定している講座・イベント等につきましても新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況により急遽中止とさせていただくことがあります。当館ホームページにてお知らせをいたしますので、ご確認いただきますようお願いいたします。

3つの密を避けましょう!



密閉空間



密集場所



密接場面

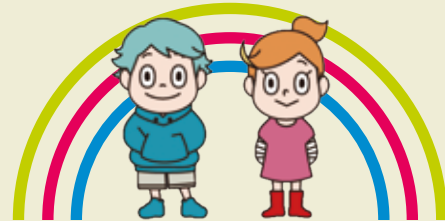
新ホームページキャラクター

お名前大募集中

こども歴史館のページと一緒に探検するキャラクターの名前を募集しています!

探検が楽しくなりそうな、みんなと仲良くなれそうな、素敵な名前を考えてください。

応募は長野県立歴史館ホームページ内のこども歴史館からお願いします。募集期間は5/5 (火・祝) ～7/20 (月) です。たくさんの応募をお待ちしています。



長野県立歴史館たより 夏号 vol.103

2020(令和2)年6月5日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: https://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業株式会社